

改善を見た。強い造血器障害を見たが致死的ではなかった。

22. 肺小細胞癌に対するEtoposideのphase II study

国療南九州病院 福永秀智
久保義広, 乗松克政

対象は、小細胞癌8例で、未治療6例、既治療2例である。投与方法は、静注6例で80mg/m²/day, 経口2例で130mg/m²/dayを5日間連続行った。奏効率は、PR2例、NC6例で、PRは、初回治療例で静注法であった。4例が生存中で、最高16ヶ月である。放射線療法を後療法した場合、化療でPRでも予後良好のようである。

23. 肺小細胞癌に対するNK171の治療経験

国療南福岡病院 広田鴨雄
大森敬仁, 八板英道, 櫻田祐一
若狭直樹, 長野 準

NK171Phase II Studyを実施、NK171 130mg/m² 5日連日内服を1コースとし、症例はStage III 1, Stage IV 3, 効果P. R. 2, M. R. 1, P. D. 1, であった。食思不振は全例に認めた。著明な骨髄、肝、腎の変化はなかった。4週目に腫瘍のregrowthあり、リンパ節の縮少効果は著明。

24. 肺野末梢部高分化型腺癌切除例の検討

佐賀医大内科 日浦研哉
加藤 収, 中西洋一, 山口常子
山田穂積
同 外科 夏秋正文, 伊藤 翼

孤立性高分化型腺癌の外科切除例10例について、臨床像及び病理組織学的検討を行なった。病理組織所見における、形態学的予後因子について検索し、核の異型度と予後とはなんらかの関係があることが、示唆された。その他の形態学的予後因子

については、今後共に検討する必要があると考えられた。

25. 肺癌切除例における組織型別にみたリンパ節転移に関する検討

長崎大第1外科 伊藤重彦
原 信介, 太田勇治, 草野裕幸
田川 泰, 横山忠弘, 岩本 勲
母里正敏, 川原克信, 綾部公懿
富田正雄

1977年以降の切除肺癌200例を検討した。腺癌においてはpT₁症例でも十分な縦隔リンパ節郭清が必要であり、扁平上皮癌でpT₁症例は無論、pT₃(p₃)症例でも局所の切除が十分であれば、手術根治度は十分期待できると考えられる。

26. p-N₂非小細胞肺癌の検討

国療大牟田病院 松尾喬之
半井一郎, 永松桂憲 石橋凡雄
篠田 厚

N₂肺癌の治療成績はN₀₋₁に比べ著しく不良である。我々はS50年~S59年の10年間に原発性肺癌109例に手術を施行した。うち28例は、p-N₂であった。p-N₂症例28例の予後を中心とし検討し、若干の文献的考察を加えて報告する。

27. 原発性肺癌に対する肺摘除症例の検討

長崎大第1外科 原 信介
碓 秀樹, 伊藤重彦, 橋本 哲
太田勇司, 草野裕幸, 田川 泰
横山忠弘, 岩本 勲, 母里正敏
川原克信, 綾部公懿
富田正雄

肺摘除例53例を肺葉切除以下例とstage別、組織型別、術側別累積生存率で比較検討した。前者は後者に比し予後不良であるが、Stage Iの扁平上皮癌、術側が左側には長期生存が期待でき、術前肺機能等も考慮し、手術適応を拡大する必要がある。

28. 当院における胸壁合併切除症例の検討—特に有茎筋弁による胸壁再建の2症例について

国立病院九州がんセンター
呼吸器部 三宅 純, 岩崎昭憲
一瀬幸人, 本広 昭, 石田照佳
野下貞寿, 原 信之, 大田満夫
福岡大病院 松嶋四郎

原発性肺癌胸壁合併切除25例の予後を検討した。胸壁潤侵度と予後とは関連が薄かった。軟部胸壁高度浸潤2例に拡大胸壁合併切除、有茎筋皮弁、筋肉弁による再建を施行したので、併せて報告した。

29. 肺癌T₁症例の検討

大分県立病院胸部血管外科

内山貴堯, 南 寛行
山下三千年, 吾妻康次
赤嶺普治

T₁症例は切除例中59例(26%)を占め、男性29例、女性30例で女性に多く、術前診断はN(-)30%, N(+)は73%とN(+)に多く、予後はN(-)であれば5年生率は77%と良好であるが、N(+)は組織学的に脈管侵襲が多くみられ、2年以内に大多数は遠隔転移をきたしていた。

30. 当院における気管支カルチノイドの臨床的検討。

大分県立病院胸部血管外科

吾妻康次, 内山貴堯, 南 寛行
山下三千年, 赤嶺普治
同 病理 辻 浩一

最近12年間に経験した気管支カルチノイド8例について臨床的検討を行った。中心型2例、末梢型6例であった。全例定型的カルチノイドであり、腫瘍径の大きいものは予後不良であり、肺癌と同様な手術が必要であり、中心型は気管支形成術の良い適応である。

31. 気管支カルチノイド手術例